笈の小文　全

へ 5
2967

笈之小文序

風羅坊芭蕉菴桃青と聞しハ
今此の道の達人なり其門葉月々ニ
茂り日々ニ盛なり門葉推て翁と
翁と呼ハ此皆芭蕉翁なることを
知れり是ハ江戸深川の庵室ニ閑居
暮しむる時ニ手つから芭蕉を植置し
ゆへし故ニへし此翁上ニより御

やられ時はすたれ代々の記を集めて
これとなつきて後のこゝろよりふ
積て瀬浩翰となる是夜よ元を
観て甚ぞ戯ては吾仙のゑとき月
まわりして八四十四百韻の色を學
爾來門葉あしといへとも唯乙州
よのミ授見をしむ乙助も群筆
と去よせさることとなりぬ今般

梓まちりしめて世傳と広めせん
と欲して物すめといへとも蔵ま病ぬ
遇て息無斬念息と從ひ侍る

江州大津松本之隠士観桂堂
砂石子
寶永四丁亥年春乙州之囑
慇求不得止染筆畢

笈の小文

風羅坊芭蕉

百骸九竅の中に物有かりに名付て風
羅坊といふ誠にうすものゝかせに破れ
やすからん事をいふにやあらむかれ狂
句を好こと久し終に生涯のはかり
ことゝなすある時は倦て放擲せん
事をおもひある時はすゝむて人に

かつは人にかたむ事をほこり是非胸中にたゝ
かうて是が為に身安からず暫ク身を
立む事をねがへども是が為に
さへられ暫ク学で愚を暁ン事をおもへ
ども是が為に破られつひに無能無
芸にして只此一筋に繋る西行
の和歌における宗祇の連歌における
雪舟の絵における利休の茶における

其貫道する物は一なり。しかも
風雅におけるもの造化にしたがひて四時を
友とす見る処花にあらずといふ事
なしおもふ所月にあらずといふ事な
し像花にあらざる時は夷狄にひとし
心花にあらざる時は鳥獣に類ス夷狄
を出鳥獣を離れて造化にしたがひ
造化にかへれとなり

秋宵月の物淋しきかなよりしき男
男と風雅流行素なき人卿して
旅人と成りなんとも思ひ入れ
又山に家居を宿くりして
岩城乃任も去りし事々の挑腸を
身て其角亭子おもて関送りを侭
すてなす
附きて冬よしのをこめん旅のつと

此句を霜姑雲ひ下して端的
侍りけるとくたむもの物かなして内
友親類門人味ある人は詩歌文章を
送て別の餞は笠鞋の料を包みな
志を尽す者三月乃糧を集めり
力と入ず紙布綿の衣をもの
帽子あつめてもの皆く送
つとひて雪霜の寒苦をいとふ

人なしあるいは小船をうかべ別墅に
席をまうけし草庵に酒肴携へ集り
て詩歌を詠し文をも物しみなを
書くるも餞へある人の前途する
まで似たりといひて拙なしく書て
延れぬれ
柳道乃日記也いはむもの紀氏
長明阿佛の尼また文を好める人情

をも書してくら餘生皆似たよ
ひある甚糟粕を随ふるあさます
海して浅智短才の筆にも及へ
もあらす至日まて雨降つくり
晴てそろを松なとかしてよ何ら云川
流れなりなといふすれともよみ
へく名得れとも草紙の萩新也
さらひはあらすは云ふなれなされ

はれども千載の風流を学なり
山館野亭のくるしき愁も且は
はなしの種となり風雲の便り
ともおもひなしてわすれぬ所々跡
やせんやと書集侍るぞ猶酔ル
者の猛語にひとしくいねる人の
譫言するたぐひに見なして人
又亡聴せよ

鳴海にとまりて

星崎の闇を見よとや啼千鳥

飛鳥井雅章公の此宿にとまらせ
給ひて都も遠くなるみがた
はるけき海を中にへだてゝと詠
給ひけるを自かゝせ給ひて給は
りけるよしをかたるに

京まではまだ半空や雪の雲

三川の國保美といふ處に杜國が
しのびて有けるをとぶらはむと
まづ越人に消息して鳴海より
跡ざまに二十五里尋かへりて其夜
吉田に泊る

寒けれど二人寐る夜ぞ頼もしき

あまつ縄手田の中に細道ありて
海より吹上る風いと寒き所也

冬の日や馬上に氷る影法師

保美村より伊良古崎へ壱里斗も有
べし三河の國の地つゞきにて伊
勢とは海へだてたる所なれども
いかなる故にか萬葉集には伊勢の
名所の内に撰入られたり此洲崎にて
碁石を拾ふ世にいらご白といふ
とかや骨山と云は鷹を打処なり

南は海のそてまく露のちらしめん
深る雨とさしいとも露なく一命ある
よゝりくりせおわす人々おあられ
なるわれめし

露一つ入ずえんしいとゝ露
熟田御娘露藤
麻なくとう寺読も漂し　雲の毛
蓮たれ乃人ともむすひとられて

きらく使り申する程
無粮とす人々もみちらしと親の宮
みち人の含
なつけて雲々人々まるゆゑみてつ
はりせて雲々人よころよ雨まで
あるん無きり
主うと探る梅は枝ふ入る朝きは
けるえ変き大姫波阜れさてられ

すきものとふらひ来りて歌仙あるハ一折
なと度ゝに及
師走十日余なこやを出て旧里
に入んとす
旅寝してみしやうき世の煤はらひ
桑名よりくはて来ぬれはと云
日永の里より馬かりて杖つき坂
上るほと荷鞍うちかへりて馬より

落ぬ
歩行ならは杖つき坂を落馬哉
と物うさのあまり云出侍れ共終に季
ことはいらす
旧里や臍の緒に泣としの暮
宵のとし空の名残おしまむと
酒のみ夜ふかして元日寝わすれたれは
二日にもぬかりはせしな花の春

初春

春立てまだ九日の野山哉

枯芝ややかけろふの一二寸

伊賀乃國阿波の庄に俊乗上人の旧跡有護峰山新大佛寺とや云名ハかりは千歳の形見をかりて伽藍ハ破れて礎を残し坊舎ハ絶て田畑となの替り丈六乃尊像ハ苔の緑に埋て御くしのミ現前と、おかまれさせ給ふに聖人の御影ハいまた全おはしまし侍るそ其代乃名残うたかふ所なく泪こほれて石乃蓮臺獅子乃座なとハ蓬葎の上に堆ク双林の枯たる跡もまのあたりにこそ覚えられけれ

丈六にかけろふ高し石の上

さ母くのこほりハ出る桜かな

伴坊山田

梅乃木れ花とふ志ろき句かな

探まそまし衣文字の留かな

笠挑山

叶山乃かすしさ吉と野老帰也

龍尚舎

梅の名も共人ゑふ芸の門の隣かな

獨代氏歌よる学の人舎

梅乃香を捨やうまきや梅の花

翠庵舎

いも棲て門を鐘花かな騒

神垣のうちに梅一本もなしいろ君

石つまもや神盲なりよう祭れれ

占石のとれなし花のほうら梅ありとも

あくて孑良の鍬の後よすりも傍る

よしをかたりつたふ

御子良子の一もとゆかし梅の花

神垣やおもひもかけず涅槃像

弥生半過る程そゞろにうき立心の
花の我を道引枝折となりて
よしのゝ花におもひ立んとするに
かのいらご崎にてちぎり置し人の
い勢にて出むかひともに旅寝のあはれ
見且は我為に童子となりて
道の便りにもならんと自万菊丸と
名をいふまことにわらべらしき名の
さまいと興有いでや門出のたはぶれ
事せんと笠のうちに落書ス

乾坤無住同行二人

よし野にて桜見せうぞ檜の木笠

よし野にて我も見せうぞ檜の木笠　万菊丸

旅の具多きハ道さはりなりと物
皆払捨たれとも夜の料にとかみこ
一ツ合羽やうの物硯筆かみ薬等昼笥
なんと物に包て後に背負たれは
いとゝすねよはく力なき身のあとさまに
ひかふるやうにて道猶すゝます
たゝ物うき事のみ多し

草臥て宿かる比や藤の花

初瀬

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

足駄はく僧も見えたり花の雨　万菊

葛城山

猶見たし花に明行神の顔

三輪　多武峰

臍峠　多武峰ヨリ龍門へ越ル道也

雲雀より空にやすらふ峠かな

龍門

龍門の花や上戸の土産ニせん

酒のみに語らんかゝる瀧の花

西河

ほろほろと山吹ちるか瀧の音

蜻蛉が瀧

布留の瀧ハ布留の宮より二十五丁

山の奥也

津の国幾田の川上ニ有 布引の瀧

大和 箕面の瀧 勝尾寺へ越る道ニ有

桜

桜がりきどくや日々に五里六里

日ハ花に暮てさびしやあすならふ

扇にて酒くむかげやちる桜

苔清水

春雨のこしたにつたふ清水哉

よのくだけに三月ゑ海りて暇乞を
のぞしきよむひに明乃月の紀
ある日旅なとんで坊より獨よみ
てあるを樵章云のすゝめにかれ
あひの枝折にやすみひか流貞室か
是ハ〳〵とあかりけるまれいそん
云楽もなくて〳〵さはるにをこち
かうるにはそしおもひ立る風流

よ紀ぞ傳帆も宮にとりて近其
のるゆあり

吉野

ちるたひに盛つくるにに雛の雲
ちる桜はたつさくらつ奥の院　万葉

和寺

あまくわが浦までの追付たり
こさみせる

跪はやぶれて西行にひとしく天龍の渡しをおもひ馬をかる時はいきまきし聖の事心にうかぶ山野海濱の美景に造化の功を見あるは無依の道者の跡をしたひ風情の人の實をうかがふ猶栖をさりて器物のねがひなし空手なれは途中の愁もなし寛歩駕にかへ晩食肉より甘しとまるべき道にかぎりなく立べき朝に時なし只一日のねがひ二つのみこよひ能宿からん草鞋のわが足によろしきを求んとばかりはいさゝかのおもひなり時々気を轉じ日々に情をあらたむもしわづかに風雅ある人に出合たる悦かぎりなし日比は古めかしかたくなゝりと悪み捨たる程

の人も辺土の道つれにかたりあひ
はにふむくらのうちにて見出したる
なと瓦石のうちに玉を拾ひ泥中に
金を得たる心地して物にも書付
人にもかたらんと思ふそ又是旅
のひとつなりかし

衣更

一つぬいて後に負ぬ衣かへ

吉野出て布子賣たし衣かへ　万菊

灌佛の日は奈良にて爰かしこ詣侍るに鹿の子を産を見て此日におゐておかしけれは

灌仏の日に生れあふ鹿の子哉

招提寺鑑真和尚来朝の時船中七十餘度の難をしのきたまひ御目のうち塩風吹入て終に御目

宵さへ待ちにかつ縁をもよせて
羨しくてはじめれ雲ねかくかな
四方にも寄る〇〇なる何ぞ
廉の角せん一郎のよみもの
大井子てある人のもとへ
杖の鏡にも旅の日くれば
次二
月見ある風も〇〇にやさし淀屋の某

月見ても物すごしや淀屋の某
卯月中比の記を〇〇にありてゆかしき
見んとかけしれ月もいとく艶なるよ〇
わり〇〇てかつ〇〇〇〇一さんの山
はなまの紅も海のうみのまるとをかしめ
ら風よ上〇〇妙なしき〇〇〇〇の〇
沼あるし見んありて浪人の軒ちかくに
荻子にれむのこゑくまつん陰さる

海士の能見んとするや此しの毛
東澳ノ西澳ノ濱ノ人とも西よわ
うれてゆきものかぎりをすするよみし
す蘆壁されつてあての少さく給
海もいかのへかうるわざするかしも見んとす
こさすごかしいようれをと網して其海に
上字かしちらしきるとかしすれ飛鳥
日でつくと去れ見を以見んてちさきん

をとすて海去れわざをも見んとする古
戦場乃名跡をたづね久てかの浦まで
ちすれやといひて罷越て彼むかしの跡
恋しかは海にて其のひろいまの浜を
するほどさするみれのなましりてとく
いひまさしうすすと海くほすりして林屏の
茶店まで抱へてたすへくとおきて云へわり
ちうさはか那ま見んてらうかれて十六と云ふん

里の童子よりは四ツはかりもをと
とゝなるへきを数百丈の先達として
羊腸険岨の岩根をはひのほれは
すへり落ぬへき事あまたゝひなりけるを
つゝし根笹にとりつき息をきらし
汗をひたして漸雲門に入こそ
心もとなき導師のちからなりけらし

須磨のあまの矢先に鳴か郭公

ほとゝきす消行方や嶋一ツ

須磨寺やふかぬ笛きく木下やみ

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

かゝる所の穂なりけりとかや此浦の実は
秋をむねとするなるへしかなしさ
さひしさいはむかたなく秋なりせはいさゝか
心のはしをもいひ出へき物をと思ふ

その近辺の拙者なとも存ねは似から
須磨浦よりはるかに見えて須磨寺
の浦なとわたる笠東南の磯
かの所やあまたの人集りて
古の境をまかりのなくてかくし
又後の方に山を隔て、田野の畑と
いふ松風村雨か住けるとて尾上
須磨の古跡へかよふなるの鐘休

のうさ逆落しなりやすらひさるのこ
路て鎌倉松らかたに一ノ谷内裏
やしきの跡の前に敦盛其代の代それ
この時のさまをさとしさまよしるひ
侍ようもひあるに二位の尼君宝子
を抱奉りて安徳天皇は海底に落入られ
給ひてさまさまのの須磨の浦
内侍局女嬬曹子のさへさまくの

調度もてあつかひ琵琶ことなんど
しとねふとんにくるみて船中に投入
供御はこぼれてうろくづの餌となり
櫛笥はみだれてあまの捨草となり
つつ千歳のかなしび此浦にとどまり
素波の音にさへ愁多く侍るぞや

寓名古屋に滞留乃時有ニ
更科紀行幸而爰に次

さらしなの里をばすて山の月見んこと
しきりにすすむる秋風の心に吹さはぎ
てともに風雲の情をくるはすもの
又ひとり越人と云木曽路は山深く道
さがしく旅寝の力も心もとなし
と荷兮子が奴僕をしておくらす
おのおの心ざし尽すといへども駅旅
の事心得ぬさまにてともにおぼつかなく

とのゝ比ましろにあとさきするうち
中くれおりしきつのゝ鈴にゆくと
いかにまゝかの汁の夜んの侍かり
みけるおりしもあかりんめいろく
ときまうら梭さとうちおて御前入はい
せらしくみてまうらすやくんあかる
まれるとまむきひるる人のあさかれ
てそのくまにかけうきよの九かの

俵のあひねをれかひろはるかにみえる
に付て爺とその上与の寸さる事峰
頭のにあはんへまりてたちま侍
すれ岸下の多勢のあはりのとをし
大蛇もすまいつまるされは嶽のまへ
静かなれはあやしき蚊のやひ付
かし様らし勝まんまをとて様この
たちまちたち跡を四十八曲りとかや

九野重りて雲路はなれたるに此
せかい出ありとも行さきのこへ就て
めでたきものはみな書みて足さる事
なりさるにかは法つけたるぬ儀にて
も、おそるゝ事もしさえすれは合に
二あるまきりにねかうて後世を
なるあまくひかりきるをはなから
つくあけてあやしきあかさりなし

仏乃法んかに衆生よりて世をのかれ
もつて深きをやとこ常風塵の道に
うつしさりかゝ女に世をうつされて
あくれは嵐を法風をはやかけきちも
夜をさすの燈を求て昼れうち
思ひあけるぬかしこゝむすひ探
さる夜るあまく夫を出て灯法
かにめかさら閉てさてうめき

休せいかのひんの筋麁孫のくく
てあおりいするやや推量し承
をきくさ給へとすわるき時ならく
かくりころ地ひかされ給ふとさ毅
とはくしもとのくあやしとおりひ
しるまれたるなしつく風を悠悟
のさかりとまりて何くとを出るなる
ませすこても酒されたる月影の

かへの旅ねならぬ木のもとかくれなけれの
ていかねの若志つあつせ香あれくつなさと
つおくる酒よしれかなすこき秋の夕家に
来せらひてや月の行ゑしれ酒瓶
まうんと又ハさなつさおか出るよれ
情ねよ一ゆくりま御陰されんとて
ふりくるもの荷倉をとろう敷の人ハ
かろかれハ風情をしてとまる

ぬれさりなるにおりしへまつけれね
眞はのゝ蜻蛉は尾乃んやちや風
もあしまり
あけすま蕣縫帯ゝ花有
様やいのちとおすてくり
様やとんありひのつるむゝ人
西方院て様ハあもぬきれず　鄉人
蝶捨山

何や蝶ひらまく月の客
いさよひもすさ清しなの秋に
さしちぬやミよさの月見かなは　鄉人
ひなりは雨よ露そしやとなし
あいたて大根ひし秋の風
未きれぬも浮世の人の兄けり
送られつ別つ果ハ未きれ秋
呂光寺

月影や四門四宗も只一つ

吹とばす石はあさまの野分哉

此記行後に乙州が謂れ有て文
くさ紙及び蕉翁の賦集く〳〵浅ねるて
紙惜し旅集を加へともに企ね

江南桃々菴乙州梓之

宝永六年孟春慶旦

皇都 諧仙堂 藏板

書肆 浦井徳右衛門
井筒屋庄兵衛
橘屋治兵衛